

復活を喜ぼう



牧師 和田 忠三

穏やかな春が、やっと巡ってきました。今年の冬も厳しい寒さが続き、大雪にも見舞われて、農作物等が大きな被害を受けましたね。

そのような厳しい寒さの後に巡ってきた春は有り難く、わたしたちの心も身体も温かく包んでくれています。春の到来は、足下ではチューリップやスミレなどが、頭上では桜や桃などが次々と花開いて自然界に復活をもたらし、喜びと安らぎを与えてくれています。

このように自然界の復活は人々に歓迎されていますが、それよりもはるかに素晴らしい復活が有ることを御存じでしょうか。それが、イエス・キリスト(以降はイエス)の復活です。その復活を記念する「イースター」は、キリスト教最大の祭りとして欧米諸国などで盛大に祝われています。日本でもキリスト教会は勿論、一般社会でも祝われ始めてきています。そこで今回は、その源であるイエスの復活について御紹介しましょう。

民衆のあいだで、イエスに対する期待が増していくのを妬んだ宗教者や政治家たちにより、イエスが十字架に掛けられて死んだとき、弟子たちは身の危険を感じていました。「自分たちも捕まって殺されるのでは」と恐れたのです。そこで密かに一軒家に集まって隠れていましたが、不安と恐怖でおびえていました。

ところが、イエスが死んでから三日目の日曜日の夕方、戸を閉めて隠れていた弟子たちの間に、突然イエスが現れたのです。仰天している弟子たちに対してイエスは、「安かれ」と言われ、続いて、手と脇腹とを見せられました。両手には十字架につけられた釘の跡

があり、脇腹には死んだことを確かめるために兵士が刺した槍の跡がありました。驚いている弟子たちに対して、イエスはもう一度、「安かれ」と言われたのです。

弟子たちは、イエスの教えと力ある業に感動して従っていましたが、多くの者は野心を持っていました。それは、「やがてイエスが、民衆の支持を得て王になるに違いない。そうなれば、自分も偉くなれる」との密かな野心でした。そのような彼らは、期待しているイエスが、十字架に掛けられて死ぬなどとは思っていませんでした。ですから、イエスから繰返し、「わたしは十字架に掛けられて死ぬが、三日目によみがえる」と聞いていながらも、全く理解できないうでした。ユダの裏切りによりイエスが捕えられたとき、彼らは恐怖に駆られて慌てふためき、我先にと逃げ出してしまっていたのです。

そんな弟子たちでしたから、死んだはずのイエスが現れたとき、喜ぶよりも仰天し、厳しく責められるのを恐れたのです。しかしイエスは、一言も弟子たちを責めようとはされませんでした。むしろ母親が子を慈しむように、「安かれ」と声をかけられたのです。弟子たちが復活を信じられない様を見て取られて、彼らに手と脇腹とを示されたのです。そこにはイエスの弟子たちに対する深い同情と、包み込む愛とがありました。そのイエスのお姿に彼らは、「預言されていた通り、イエスは復活されたのだ」と悟って喜んだのです。彼らはイエスの復活の証人となり、大胆にイエスについて語るようになり、こうして全世界にイエスの教えが広がっていったのです。

イエスは、「わたしはよみがえりであり、命で

ある。わたしを信じる者は、たとえ死んでも生きる(聖書)」と述べておられました。事実、イエスは死から復活されたのです。それは、「イエスを信じる者に与えられる永遠の命と、死からの復活」の確かな証拠となりました。信じれば、誰にでも与えられる恩恵なのです。イエスの復活を喜びましょう。

どうして教会に行くの？

無気力でいたそんなときに、一枚のチラシを駅前で渡されました。家に帰り開いてみると、死後のことが書いてあり夢中で読みました。死後、近頃の医者にて診断。「すぐ治る」と言われたものの、数日たっても激痛は止らず、両親は隣の軍医の所に運び込みました。一見みて盲腸炎で腹膜炎の悪化と判断され、直ぐ手術しなければ命がない。幼少のため麻酔なしの手術を受けました。大変痛かったことを覚えています。

クリスチャンのさまざまな体験を綴ります。

た。「関心あり」に丸をつけて添付の葉書を投函したが、私がキリスト教に接する第一歩となりました。

数日後、牧師さんと青年が尋ねて来られ、教会への誘いを受けましたが、年老いた親がどう思っかななどの心配から、うやむやにしていた。しかしその後、親友の両親からも誘いを受け、親友が行くならと出かけました。今、思えば、豊中泉教会につながる、神様の計画と受け取れます。

教会に通い始めて三年が過ぎたころ、青年会の先輩から十字架の意味や罪と死、救いのことをコンコンと泣きながら説き明かしてくださいました。三ヶ月かかってやっとわかったときは、二人で泣いたことを今でも忘れません。「もし、わたしたちが自分の罪を告白するならば、神は真実で正しいかたであるから、その罪をゆるし、すべての不義からわたしたちをきよめて下さる(聖書)」が示されて、理屈なく信じることができました。一九六七年五月十四日、能勢川で洗礼を授かりました。その夜の伝道礼拝でうれしく神さまの話をしたことを私は生涯忘れません。



京都・綾部にて(1957年)

イースター(復活祭)

イースターとは、イエス・キリストさまが十字架上で死なれた後、3日目によみがえられたことを記念するキリスト教最大のお祭りで、欧米諸国では広く祝われています。

クリスマスと違って、日本であまり知られていないのは、日にちが固定されていない点にあるようです。325年の世界教会会議で「春分の後の最初の満月の次に来る日曜日」と制定されていて、3月下旬から4月下旬の間に行われており、今年は4月20日です。イースターエッグなどが知られています。

あかし

人は死んだらどうなるか

私は、一九四五年に五人兄弟の次男として疎開先の京都府綾部に誕生しました。六才のとき、腹痛に襲われ、近頃の医者にて診断。「すぐ治る」と言われたものの、数日たっても激痛は止らず、両親は隣の軍医の所に運び込みました。一見みて盲腸炎で腹膜炎の悪化と判断され、直ぐ手術しなければ命がない。幼少のため麻酔なしの手術を受けました。大変痛かったことを覚えています。

十一歳のとき大阪に戻りましたが、勉強の遅れなどで苦勞の連続でした。父親が起こした交通事故での金銭的な問題で進学を諦め、専門学校を卒業し、すぐに就職しました。その後、姉が結婚。期待と共に訪れた出産時、姉も子どもも亡くなってしまいました。期待が悲しみへと変わり、葬儀のあいだ「人は死んだらどうなるのか」と、ずっと考えましたが、いくら考えても分りませんでした。

無気力でいたそんなときに、一枚のチラシを駅前で渡されました。家に帰り開いてみると、死後のことが書いてあり夢中で読みました。死後、近頃の医者にて診断。「すぐ治る」と言われたものの、数日たっても激痛は止らず、両親は隣の軍医の所に運び込みました。一見みて盲腸炎で腹膜炎の悪化と判断され、直ぐ手術しなければ命がない。幼少のため麻酔なしの手術を受けました。大変痛かったことを覚えています。

た。「関心あり」に丸をつけて添付の葉書を投函したが、私がキリスト教に接する第一歩となりました。

数日後、牧師さんと青年が尋ねて来られ、教会への誘いを受けましたが、年老いた親がどう思っかななどの心配から、うやむやにしていた。しかしその後、親友の両親からも誘いを受け、親友が行くならと出かけました。今、思えば、豊中泉教会につながる、神様の計画と受け取れます。

教会に通い始めて三年が過ぎたころ、青年会の先輩から十字架の意味や罪と死、救いのことをコンコンと泣きながら説き明かしてくださいました。三ヶ月かかってやっとわかったときは、二人で泣いたことを今でも忘れません。「もし、わたしたちが自分の罪を告白するならば、神は真実で正しいかたであるから、その罪をゆるし、すべての不義からわたしたちをきよめて下さる(聖書)」が示されて、理屈なく信じることができました。一九六七年五月十四日、能勢川で洗礼を授かりました。その夜の伝道礼拝でうれしく神さまの話をしたことを私は生涯忘れません。